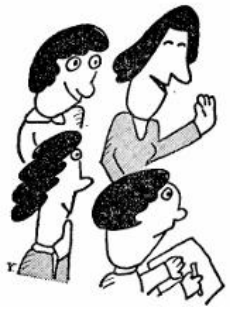
# 石井勲の漢字教室

## 別巻 母と子の実践教室

### Ⅰ 子どもはみな神童

### Ⅴ 第一線教師の疑問に答えて

石井先生との二〇問二〇答





〔問一〕 暗誦をさせるさい、抑揚のつけ方は、どのように指導していったら良いのでしょうか。

〔答〕 抑揚は統一して、できるだけ良い抑揚のものを子供に聞かせてまねをさせるとよろしい。子供というものはそのままそっくりまねをするのが上手ですね。だから東北に生まれた人は東北弁が身につくし、関西に生まれた人には関西弁が身につくのです。とにかく子供というのはその通りに真似られるのです。これは子供の特徴で、大人にはできないことです。とかく子供は無力だと考えがちですが、子供と大人では能力がいろいろな面で極端に違うのです。ですから子供にとっては、A先生とB先生の抑揚が違うというのはとてもこまることで、アクセントについても同じことが言えますが、先生によって違うということでは本当の意味での言葉の指導にはなりません。だから先生というのは標準語をしっかり身につけなければいけないと言われるのです。子供はその違いについてはとても敏感で、一定のリズム、アクセント、抑揚で話をされないと迷いが生じて言葉の習得が非常に困難になります。です

から、先生自身の勉強が必要です。私の園（東京・青桐幼稚園）ではビデオを利用しまして、私が標準と思われる読み方で暗誦するのを録画しておき、それを必要な時に放映しています。どこの園でも、ビデオやテープレコーダーを利用した一定の暗誦教材を作っておくと良いと思います。

〔問二〕 絵本にあまり関心を示さない子供がいるのですが、そのような子供にはどのように指導していったら良いのでしょうか。

〔答〕 どうして関心を示さないのか、原因を探らなければなりませんが、他の子供に比べて文字に対する関心が弱かったり、まだ絵本を読む段階以前の子供もいたりします。つまり、文字や絵本に関する能力が低いわけですが、そのような子供には、他の子供のまだ知らないような漢字を、その子にだけそっと教えておいて、フラッシュカードを見せる時に、その子にその漢字を読ませますと、自信がついて漢字に対する関心が強くなることがあります。関心は、出来る子供ほど強く、能力の低い子供ほど物事に関心を示しません。出来ないから関心をもたない。関心をもたないから増々出来なくなる、という悪循環に陥ってしまっているのです。そういう子供には特別な手当を講じなければなりませんが、「自分にも読めるんだ」「他の子が読めない字でも読めるんだ」というような自信や喜びをもたせてやると、子供の心構えが変わって関心をもつようになってきます。絵本でも、教室で一斉に指導する前に、父兄や先生が個別にそっと教えておいた上で指導に入ると、他の子がまだ読めないでいるのにその子だけが読めるということになって、非常に自信がつき、絵本に強い関心を示すようになります。これはあくまでも手段としてお考え下さい。出来るということが一番の関心の強くなる理由ですから、出来る子はいつでも一所懸命やりますし、出来ることが楽しくて絵本を読むのが待ちどおしいほどですが、出来ない子にとっては、それをすることが、いやでいやでたまらないものなのです。

〔問三〕 年長になっても幼児語が抜けない子供には、その都度、注意しても良いのでしょ

うか。

〔答〕 一口に言うと、その都度注意してはいけないということになります。その都度注意していたら、口をきかない子供になってしまう恐れがあります。原因がいろいろあると思いますので、それをはっきりさせないと一概に言えません。たとえば聴力が弱い、発声器官に問題がある、母親の言葉に問題があるなどです。ひどい場合には、母親に正しい発音、発声を習得してもらうなど、家庭の協力を得ることも大切だと思います。私の園ではそのような子供を扱う場合には、まず母親を呼びまして、子供と話をしてもらいます。そうすると多くの場合、親に問題のあることがわかります。たとえば、小さい時ひとり遊びを好んでするのであまり話しかけなかったとか。やはり、親の話しかけで言葉を習得していくわけですから、その話しかけが少なかった子は、どうしても言語の発達が遅れてしまいます。正しい発音の言葉を数多く聞いていれば、このような問題は起きないはずです。問題が起きるのは親の方にその原因があるからです。子供の方の原因は聴力か発声器官の問題くらいです。そこで家庭の協力を得てなるべく正しい発音で話しかけを多くし、子供に話をさせる機会を多くもつようにして、直していくのが良いでしょう。注意してもそれだけで直るものではありません。「おとうたん」「じれんしゃ」などと言った時、その都度注意し、直していると、子供はきらって、話さなくなることがあります。耳が悪くなければ、自分の発音と他の人の発音の違いに気づいて、自分から直そうとしますので、時間さえかければ直ります。早く直せばすぐ直ると思ったら間違いで、無理矢理直そうとするのは危険です。大切なのは気長に見守ることでしょう。

〔問四〕「河」と「川」との違いを質問されたのですが、辞書には同じ意味に書かれていました。違いはあるのでしょうか。

〔答〕 日本では「かわ」のことを河川と言いますが、河の方は比較的幅の広い長い「かわ」を意味し、大きな河に流れ込む小さな「かわ」を川と書きます。ですから小さな「かわ」を

小川と言ったりします。中国では、「河」はもともと黄河のことであり、固有名詞的に使われていて、その他の「かわ」を川と書いたようです。

〔問五〕 フラッシュカードは集中力を養い、脳の反射神経を養うためにやるのであって、漢字を覚えさせるために便うのではないのでしょうか。

〔答〕 何々のためにやると言っても、ひとつの目的だけでするのではなく、いろいろな目的があるわけです。大きな目的を言えば集中力や反射神経を養うということもありますが、そのほかにも、いろいろな効果があります。石井式漢字教育の目的は漢字を覚えることではない、と言っても漢字を覚えることが悪いことではなく、ある意味から言えば大きな目的でありますが、先生の方で漢字を覚えさせるということを大きな目的としてその意識をもつと、子供の方がかえって覚えないという結果になりやすいので、そのような目的意識をもってはいけないといっているのです。フラッシュカードをやった結果子供達は漢字を覚えていくでしょうし、子供が漢字を覚えることは彼らにとって得意なことです。ですから集中力や反射神経を養うという目的もありますが、漢字を覚えるというのも大きな目的であります。教育一般に言えることだと思いますが、何かを教える場合、便宜的な理由というものがありますが、実際にはその他にも多くの有益な効果があります。また教師としては、今まで知られていなかったような効果を発見していく目をもたなければいけないと思います。

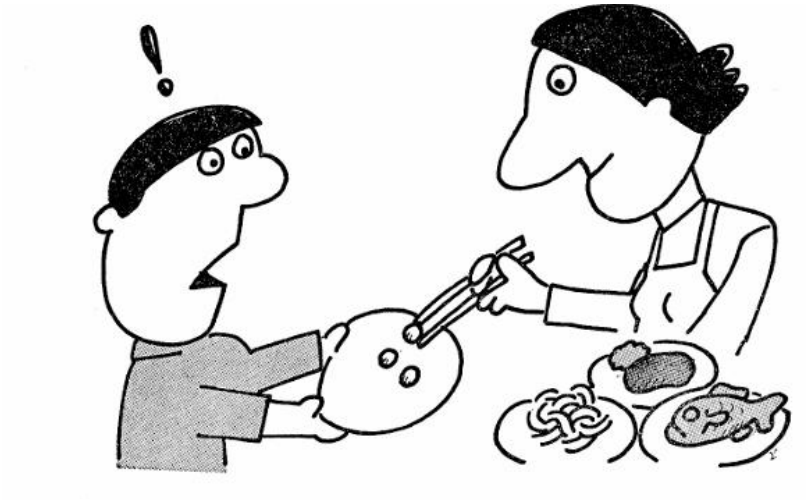
〔問六〕 形容詞を送り仮名に頼って読んでいる子どもがいます。それでも良いのですか。

〔答〕 形容詞の送り仮名は殆んど「い」とか「しい」ですから普通は送り仮名では読めないはずです。動詞では送り仮名が漢字によって違いますから、ある程度送り仮名で読めるかもしれません。形容詞の場合は「い」が多いのでむずかしいと思います。ただ「大きい」「小さい」などは間に「き」や「さ」があるので判りやすいですが、数としてはそれほど多くはありません。よく文章の前後関係から読んでしまう子がいます。たとえば「嵐が」と言えば「起

る」と自然に読んでしまうようなことがあると思います。このようなことはとてもよいことで頭のよい訓練となります。

〔問七〕活字になった漢字とペンで書く時の漢字とは違う場合があります。そういうことは気にする必要はないのですか。

〔答〕いろいろな漢字を目にすることによって漢字の認識が深まるわけです。いつも同じ大きさや形のものを見ていると、少し違った書き方のものがでてきても読めないということがあります。いろいろな人の書いた、ちょっとした違いのある字を読むのはとてもよいことで、能力を高める練習になります。活字ばかりを見てるのはあまり良くないことで、A先生の書いた漢字でも、B先生の書いたものでも読める、という文字の識別力、認知力を養うことが大切です。ただ最初からいろいろな書き方のものを見せていると混乱してしまいますから、最初は漢字カードのように基本的な一定の活字で教えていって、徐々に他の書き方のものを



応用的に読ませるというのが一般的なやり方です。しかしこの一般的なやり方以外の方法でやったら絶対にいけないか、というとそうでもありません。多くの先生は「このやり方でやると一番効果がありますよ」というとそれしかやりません。広く教育ということをみても、一番効果のあるものだけをやっていても駄目で、二番目、三番目、四番目の方法と、別の形で教えるということも大切です。食べ物の好物でも同じことで、いくら好物でも、毎日ずっと同じ物では見るのも嫌になるようなものです。一番効果のあるものを一番効果的にするためには、二番目三番目のものも必要なのです。最高のものだけでは飽きてしまいますので、たまには無駄なこともしなければいけません。時たま一番

の好物を食べるからとてもおいしいわけです。よく先生方は一番効果のあるものはと尋ねますが、一番効果のあるものだけではなく、効果のないようなことも時には必要なのです。みなさんは食べ物を食べる時、栄養のあるものだけを食べるでしょうか。たまには胃腸では全く消化されない、もちろん栄養分などなにもない、体を素通りするだけの繊維類のものも食べるでしょう。そういうものが人間の体には必要なのです。教育にも同じことが言えると思います。無駄を恐れてはいけません。有効性ばかりを考えて、なるべく栄養の高いもの、一番おいしいものばかりの教育では、動きのとれないことになってしまいます。栄養過多の子供が増えて、あまり子供にとって良いことではありません。

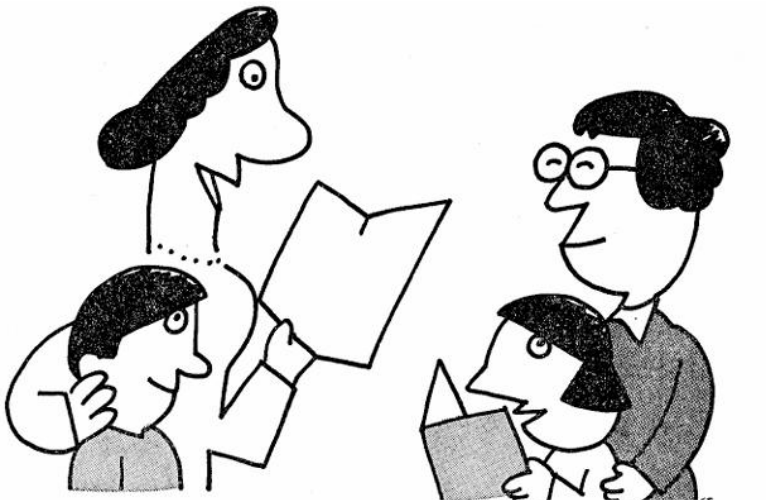
〔問八〕 熟語の場合、たとえば〝鉄棒〟は〝鉄〟が「てつ」、〝棒〟は「ぼう」と、漢字をそれぞれ区切って読めた方が良いのか、それとも〝鉄棒〟はあくまで二字で「てつぼう」と読む方が良いのですか。

〔答〕 最初は「てつぼう」と読ますべきで、後に鉄は「てつ」、棒は「ぼう」と自分の力でわかるようにさせるべきです。教育者は教えなければいけないことと、教えてはならないことの二つがあることを理解しなければなりません。教師だからといって何でも教えればいいのではなく、教えてはならないことと、是非とも教えねばならないことがあります。教えなくてはならないものは、教えなければ絶対に子供にわからないことです。子供は生まれながらに何もかも知っているわけではありませんから、いちどは教えてやらなければいけませんが、教えてやらなくてもわかる、ということもあります。これが鉄棒だということは教えなければわかりませんが、それがわかれば、鉄棒が二つの部分から成っていて、上の字が「てつ」で下の字が「ぼう」だ、ということは想像や察してわかってくるものです。そういうものーー想像や察してわかるものーーは教えない方がよいのです。子供が自分で鉄は「てつ」、棒は「ぼう」とわかったその時に、その子を大いにほめてやるのです。ほめることによって、子供は大きな自信をもつことになります。教わらなかったことが自分でもわかるーーこれが発見の喜び、人間の人間らしい喜びですので、できるだけこの発見の余地を残しておくこと

が大切です。私の園で実際あったことですが、ある先生が子供達に「悪魔」という漢字を教えようとした時、子供達が「自分たちに考えさせてください」と言いました。考えてもわかるまいと高をくくっていたところ、まず子供たちが自分たちの知っている漢字、心と鬼があることを発見しました。そこであるひとりの子供が、新聞でみた「凶悪犯人」から悪を思い出し、悪い鬼のようなものだったら「あくま」だろうということで、ついにわかってしまったそうです。子供は、教えてやらなくても自分で考え出すという力をもっているもので、ひとたびその力を発揮すると、発見することが楽しくてしようがないものです。教えてもらって物知りになるよりも、自分で発見して物知りになる方がはるかに楽しいのです。ですからあまり教え過ぎたり、何でもかんでも教えるのが良い教師ではなく、教えないで子供達に考え発見させる余地のあるものは、全て残しておくことが必要です。そして子供達が発見するまで待つということが大切です。考えてわかるまでの時間を与えることが大事です。先ほどの話に戻りますが、子供達にちょっとした時間を与えて考えさせればわかるものや、思考力を育てる意味で考える過程が大切な事柄は、これは絶対に教えてはならないことです。

〔問九〕フラッシュカードや漢字の絵本など、普通に興味を持ってやっている子どもはいいのですが、まるで興味のない子どもには、いろいろとやり方を変えているのですがなかなか読めません。どうしたら良いでしょうか。

〔答〕興味を示さないというのは出来ないからだと思います。他に原因があるのでしたらその原因を探らなければいけませんが、私の考えでは、出来ないからおもしろくない、それでそっぽをむいてしまうのだと思います。運動会の徒競走などを思いだしていただきたいのですが、競り合っている時には余り差が出ませんが、少し差がついて、とてもかなわないと思ったとたんに、ぐんと差が開いてしまいます。なぜかと言うと、この競り合いに自分は勝てないと思ったらそれでおしまいで、力が半減してしまうのです。ですから勝負がつくのはちょっとした気持のもち方ひとつで、最終ゴールの時の開いた差だけの差があるわけでなく、ほんの少しのことでこうなるわけですから、子供にあきらめさせたり、「自分は駄目だ」などと思わせることが興味を失わせる原因なのです。できない子には誰も知らないようなことを



内証で教えておいて、みんなの前でそれを披露させるということをすると、俄然やる気を出すことがあります。これは私が小学校一年生で実験して成功しました。一たん自信がつくとやるようになりますし、やるようになれば出来るようになりますので、得意にならせるということが大切です。

〔問十〕当用漢字になく普段使われないような字でも、漢字で書けるものは書いた方がよいのでしょうか。

〔答〕当用漢字とか使われない字であるとかをあまり気にせずに、漢字で表現できるものはどんどん漢字で書いて下さい。

どんな言葉も子供にとっては漢字の方がわかり易いのです。なぜかと言うと一文字でまとまりがついて、その特有の形をもっているからなのです。人間の顔でも同じことで、全て同じ顔だったらとても覚えられないのですが、みんなそれぞれ違う顔をしているから覚えられるのです。複雑な顔ほど印象に残り、覚え易いものです。漢字で書けるものは全て漢字で書いてやって下さい。仮名の方が易しいというのは今までの誤った固定観念です。

〔問十一〕漢字の絵本を楽しく読むようにするには、どのようにしたら良いでしょうか。一回読むのにどのくらい時間を取ったらいいでしょうか。

〔答〕いろいろな変化をつけてやるべきで、いつも決まったパターン、決まった時間でやるよりも、その時々の変化に応じて時には長く、時にはあっさりと、変化をつけた方がよいと思います。つまり、どのようにしたらよいかではなくて、いろいろな方法を試みる方がよい

のです。私がAと言ったからAのやり方で教えるよりも、自分でその時に応じてちょうどいいと思われる所で、ある時は長く、ある時は短くやってみて下さい。食べ物でもごちそうばかりを食べさせるのではなく、たまにはあっさりとした味の物や、あまりおいしくない物も食べさせて下さい。感情を込めて読むということは、文というものの良さを子供に伝えますのでとてもよいことです。感情のこもらない読みというのは絶対によくありません。

〔問十二〕漢字カードを一日に何回も行なって飽きることがあります。どうしたら新鮮に、かつ楽しく読めるようになるでしょうか。

〔答〕一日に何回もやって飽きることがないというのはむずかしいことですので、いつでも同じようにやるのではなく、なるべく変化をもたせることが大切です。もともと飽きるような長い授業の合い間にさっと短い時間で気分転換を計るのが漢字カードの目的なのに、一日に何回もやったら飽きてしまうというのはおかしいですね。先生の方に「またか」という気持があると、子供にもその気持が移るのです。学習が続いて子供達の間に何となく倦怠感がただよってきたところで、その雰囲気をひきしめたいという時にやるのがこの漢字カードなのです。ですから、先生自身が張り切って子供に対面し、火花の散るような読み比べをすることによって、今までだれていた雰囲気が緊張するのであって、飽きるようなやり方ではまずいですね。

〔問十三〕漢字の絵本などを、字で覚えるのではなく暗記してしまう子供がいますが、それでよいのでしょうか。文章を暗記してしまっているため、文中の漢字そのものを少しも読んでいません。

〔答〕それでいいのです。文中の漢字を少しも読みませんとありますが、ほんとにそう断言できるでしょうか。暗記してしまって、それで本を見ないで読んでいるのでしょうが、時にちらっとでも漢字を見ればよいと思います。子供は暗記力が強いので丸暗記してそれでいい

のですが、時には字を追って指でおさえながら読ませることも必要でしょう。そういうことを時々やらせれば、漢字に対する認識が深まってゆくものです。

〔問十四〕漢字のフラッシュカードを行なっていると、よく読める子とそうでない子がいます。このようなカード類を、ただ見せて何と読めるか聞かせるだけで良いのでしょうか。

〔答〕漢字カードを読むということは、ただ発音できるというだけのことであってはなりません。その漢字の意味する内容が、まざまざと頭の中に展開されるようでなければなりません。そのために石井方式では「漢字で教える」と言って、経験させることを重視しているのです。牛を見たことのない子に牛という漢字を教えて、その漢字が読め、また書けたとしても意味がない。まず牛を実際に見せて、その牛を〝うし〟と言い、〝牛〟という字で表わすことを理解させます。そうすれば、〝牛〟という漢字を見れば、かつて見た牛そのものの姿を頭の中にまざまざと思い浮かべることが出来ます。

漢字カードを読むということは、そういうことでなければなりません。そうすれば、どの子も漢字カードを読むことを楽しむようになるものです。次にどんな学習でもそうですが、よく出来る子とそうでない子が必ずいます。子供によって能力が違うからです。私は能力の差は生まれながらにあるものだからどうしようもないものだと思います。仮に皆が同じような能力を持っていたら、世の中が困ってしまうでしょう。全ての人が総理大臣になれる能力を持って大臣になったら、その他の仕事をやる人がいなくなってしまうでしょう。人間の社会にはいろいろな能力の人がいて、いろいろな職業があるのです。教育において全ての子供を見かけ上同じような段階にもってゆくということは、手を抜かなければ出来ないことです。運動会の競争を見ても明らかで、真剣に走れば走るほど一着とビリの差は広がり力を抜いていい加減に走れば皆一団となってゴールに突入することが出来ます。子供達の能力を十分に発揮させた上で、同じようにゴールさせようとしても、それは不可能です。ところが多くの教育者は、皆同一ゴールすることが理想と考えているのです。能力のある者が力を抜かない

限り同じようにすることは出来ません。戦後の日本の教育は、はっきり言ってエセ民主主義です。ヨーロッパ等では徹底的に、エリートとそうでない者とを区別する選別教育です。ドイツでは中学の時点で選別し、イギリスでは Eleven Test と言って、十一歳になると国家試験を一斉に受けさせて、上の学校へ行く子を選定しています。私は英才教育に賛成です。英才は英才として教育されないとのびません。集団でゴールさせようという教育では、せっかくの英才も駄目になってしまいます。英才は自分の能力を十二分に発揮できるような環境において教育されるべきで、それに適した難問をどしどし課さなければいけません。そういう教育を今の日本人はしていません。

精薄児対象の特殊学級が必要なように、英才対象の特殊学級があっていいわけです。それがほんとの民主主義というもので、全ての子が同じ力を持つのが決して理想ではありません。

〔問十五〕 年長になると、漢字を書きたがりますが、書かせてもいいのですか。もし書かせる場合、筆順は教えなくてもいいのでしょうか。

〔答〕 一般的には書かせる必要はないのですが、どうしても書きたいという子供に対して「書くな」という必要もありません。筆順については、どこまで教えたらよいかと言いますと、上下の線を書くには上から下へ、左右の線は左から右へという原則的なことだけで、それ以外はあまり考慮しなくても大丈夫です。

〔問十六〕 暗誦を指導するさい、細かく区切った方がいいのですか、それとも全体を通してしまった方がいいのでしょうか。

〔答〕 初めから全体を通してやるというわけにはいきませんし、長いものを全て覚えることもできませんので、最初はやはり細かく区切ることが必要です。しかし長いまま暗誦できるようになったら、そのまま続けた方がいいのです。しかし長いままやってみてうまくできなかったら、再び細かく区切ってやり直すことが必要で、初めからこのような問題にこだわらずに、子供の状態や反応をみて判断すべきことだと思います。

〔問十七〕赤い色は子どもの視覚に一番よく訴える色と聞きますが、赤文字の漢字カードを見せると効果的なのでしょうか。たとえば暗誦用の長い文章は赤だと集中しにくいように思われるのですが。

〔答〕赤は全体のなかで抜きん出て見えますので、たくさんの文字のなかに赤い文字があると目立ちます。私が主幹として作成した「学習漢字図解辞典」（三省堂刊）でも、重要なところは赤い文字で表記してあります。そこだけが印象的に浮かび上がってくるからです。ドーマン博士も、子供に教える最初の十枚のカードは赤い文字で表わしています。ただ幼稚園で使う漢字カードの類は、ことさら赤くする必要はないと思います。

〔問十八〕クラスにどもりの子供がいるのですが、そのような子に対する特別な指導というものはあるのでしょうか。早いうちに直してあげたいのですが、漢字教育や暗誦で直せるでしょうか。

〔答〕どもりの子に対しても漢字教育や暗誦は効果があります。どもりにもいろいろな原因があると思うのですが、まずその原因究明が大切です。原因が肉体的（たとえば発声器官に異常がある）なものでない場合――たとえば、せっかちにしゃべるうちにどもりになってしまった とか、どもりの真似をしていて本当にどもりになってしまったなど、ある程度、どもっている状態を続けているうちに習慣化してしまうケースが多いのですから、ゆっくりと一定のリズムで読むという反復練習をしていれば、どもらなくなると思います。ただ幼稚園だけでなく、家庭でも母親がゆっくりと会話をするというようなことも必要なのです。

〔問十九〕自閉症の子供に対しては、どのように対処していけばよいのでしょうか。わかっているのかどうかもわからずに続けていってもよいものでしょうか。

〔答〕自閉症の子供といっても原因や症状がさまざまで何とも言えませんが、ここでは先生の言うことに耳を傾けようとしなかったり、自分勝手な世界を作ってそこから一歩も出よう

としないというように理解すると、その原因は親にあります。この場合、そのまま自閉的傾向を直さないと将来大変なことになるということを親に訴え自覚してもらうことが大切です。自閉的傾向を示す子供は比較的知能が高く、精薄の子供はそのような傾向はありません。自閉的な子供には漢字などをよく覚えたり、何かひとつのことに熱中してやるという傾向がありますが、それは幼児期だけでして、それ以後は知能もガタ落ちになります。幼児期には賢そうにみえるので、親はわれわれが思うほど深刻には考えていません。ですから、そのような親には強く訴えて自覚してもらうことが大切です。自閉的な子供は、ひとり遊びが好きで泣きもせず親にほとんど世話をかけずに育ってきた場合が多く、親も手がかからなくていい子だと思って、その自閉的傾向を育てていることが多いのです。子供というものは親が育てなければ駄目な存在でして、他の動物よりも特に人間は未完成な状態で生まれてくるのです。これは大脳生理学の分野で明らかにされています。下等動物や哺乳類以外の動物は親が子供をほったらかしにしておいても育っていくようにできているのです。哺乳類にしても人間以外のものは子供のひとり立ちが早いのです。人間の場合は成人するのに二十年もかかるくらいですから、親が何年も手をかけなければならないのです。特に、脳の出来上がる生後三年間というのは、親は子供から離れてはならないのです。私は現在、松下政経塾で教えていますが、塾生に対してよく説くことは、諸君がこの日本を背負って立つころには、父親の給料で十分家計を維持できるような社会にしなければならないし、もし母親が働かなければならないなら、子供の少なくとも生後三年間は、家庭にいて育児をしながら給料がもらえるようにしなければいけません、と。そうしないと立派な人間にはなれません。人間は人の間と書きますが、この意味は、人と人との間にあって人となり、人間性を備えるからこそ人間であって、人間と人とは違うのです。ヒトというのは人間の顔や体をもったものに過ぎない生物としての人であって、どんな心をもっていようとも関係ないものなのです。しかし、人間というものは人の心がわからなければなりません。生後二、三年間は母親がしっかりと寄り添い、お話をしたりあやしたりして、子供の言葉の発達があるわけです。自閉症の子供というのはこの世の中にわれひとりという状態なのです。しかし、好きで自閉症になったわけではなく、そのように親に育てられてしまったわけなので、親にこんこんと説教し、反省しても

らい、毎日子供と話し合う機会をたくさん作って、その自閉的傾向を解消してゆかなければなりません。とても時間がかかって大変ですが、母親以外に直す人はいません。親こそ最良の教師であり医師でありますので、幼稚園の先生ひとりでできることではありません。

〔問二十〕偏のつく漢字で、たとえば虫偏の〝蟻〟や〝蜂〟などはすべて同じに見えてしまうらしく、〝蜂〟の字をみて「アリ」と言ったり、〝蟻〟をみて「ハチ」と言ったりしてしまいます。どうしたら良いでしょうか。

〔答〕物には全て同じ部分と違う部分があります。たとえば、A子とB子では同じところをたくさんもっていますが、同時にA子にはA子特有の、B子にはない面をもっているわけでして、それによってわれわれは、識別することができるのです。同じところと違うところがありますので、同じところばかり見ていれば間違えてしまいます。ですから、子供には似たような二つの漢字を同時に見せて、同じところもあるが、違うところーー蟻の義と蜂の傘のように異なるところがあるということを、はっきり示して教えてやることが大切です。また記憶のはっきりしないうちは間違えることがありますので、その時はとがめず、ただ誤りをそのつど正してゆくようにしていれば認識が段々に深まります。子供には、物の違いに着目することの重要性を敢えてやると同時に、反復練習を積み重ねて下さい。

（昭和五十七年六月／川崎・第二ひかり幼稚園にて）